令和五年五月一日発行　毎月一回一日発行

書道研究誌

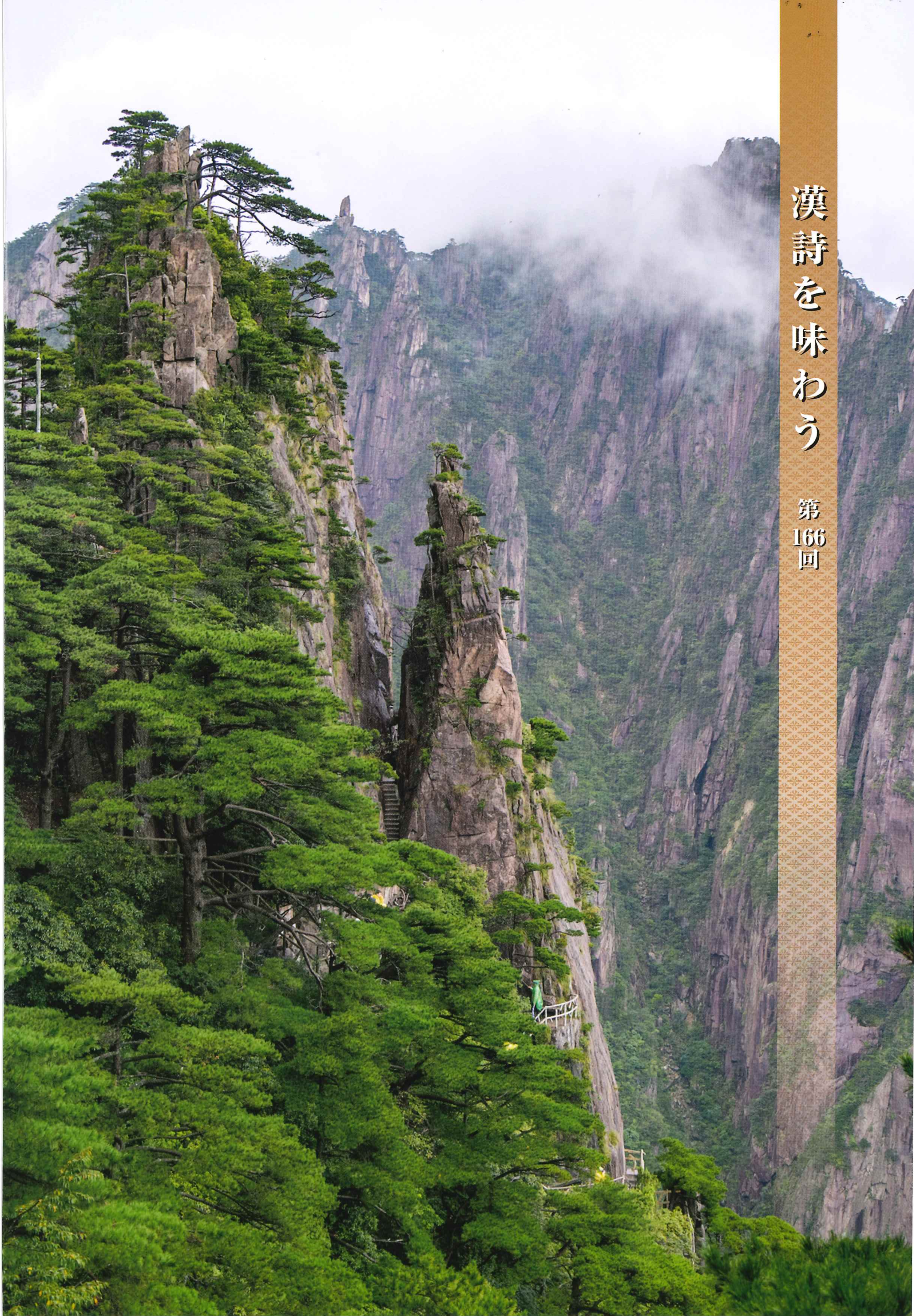
書の光

5
2023

Vol.657
宮城野書道会

漢詩を味わう

第166回



寒山詩

可笑寒山道
而無車馬蹤
聯谿難記曲
畳嶂不知重
泣露千般草
吟風一様松
此時迷徑處
形問影何從

笑うべし寒山の道
而も車馬の蹤無し
聯谿　曲を記し難く
畳嶂　重を知らず
露に泣く千般の草
風に吟ず一様の松
此の時　径に迷う処
形は問う　影は何れ従りするかと

この寒山の道はなかなかおもしろい。
しかも車馬の通う跡もない。
連なる谷つづきで、幾度曲折しているか覚えきれない。
畳なわる峰々はどれほど重になっているかもわからない
いろいろの草はしっとりとおりた露の下に泣き、
どの松の梢もみな風に鳴って同じ歌を歌っている。
この山で道に迷ったならば、
自身の影に「どう行けばよかろうか」と問いかけるより外はないだろう。

《可　笑》おもしろいの意。嘲笑の意味ではない。
《曲　》渓谷の曲折。
《重　》山峰の重畳。

寒山は中国初唐の禅僧といわれ「寒山子」とも呼ばれます、日本では国清寺の僧侶拾得とともに画材の人物として知られています。また森鴎外の短編『寒山拾得』によって親しまれています。しかし実在のひとであったか否かも不明で、非常にミステリアスな存在です。一説によると、寒山は八九世紀の人で、妻や家族との縁を絶ち、諸地方を放浪して多くの書を読み、寒山に隠棲して、やがてその名で知られるようになり齢百歳を数えたといいます。隠棲していた寒山は、寺院と道教で有名な天台山の近くにあるといわれ、天台宗との関係も否定できません。

寒山の詩は無題の詩が殆どで、自然を巧みに描写し、幽隠の興を示す詩や、禅の影響を感じさせる多い一方、内容はすこぶる雑多で、いわゆる漢詩人の詩とは趣を異にしています。このことにより詩の作者は一人ではないという説もあります。

日本語訳では禅的なものとして一歩踏み込んで詩を解釈する場合もみうけられますが、今回の上記釈文は単純に字面通りのものです。

最初の四句「車馬の通う跡がなく、幾度も峰を越える曲がりくねった寒山の道」は、寒山は人跡を絶した天地であるとしてなかなか面白いと言います。一般的な訳では、陶淵明詩『飲酒』の「廬を結んで人境に在り、而も車馬の喧びすしき無し」を踏まえ風雅な光景と捉えます。禅的には、禅者の修行の厳しさに通じると解釈をします。

「泣露千般草　吟風一様松」の二句は古くから禅の公案にも用いられ、茶席の掛軸などに書かれる場合も多くあり、禅語として大切に扱われる句です。江戸中期の禅僧白隠は、この句を寒山の自身のこころ、人生の景観をうたっているものと言います。さらにこの景観に象徴されたさとりの心境には容易に近づき難いとして、露に泣く草や、風に吟ずる松は「釈迦牟尼仏の姿であり声である」としています。

終わりの句「形は問う影は何れ従りするかと」も陶淵明詩『形影神』が背景にあります。これは、肉体である形が分身である影に問いかけるという禅問答のような対話形式の詩です。陶淵明の詩には膺化術という術をつかい大空に舞い上がる仙人の句があるなど、隠者詩人としての名声が高く、寒山も好んで作詩の典拠としたようです。

漢詩は一見簡単なような詩でも、様々な解釈があります。詩の詠まれた背景などを知ると詩の印象も変わりますが、素直に詩情を楽しむことが先ず大切です。

参考文献：松原泰道著「禅語百選」（祥伝社）・中國詩人大系「寒山」（岩波書店）

山青くして華然んと欲す

《大意》山は青々として生い茂り、花は燃えるように赤い花が咲き誇っている。（杜甫詩「絶句」の一節）

幽竹人の如く静かに　閑花我が為に香ばし

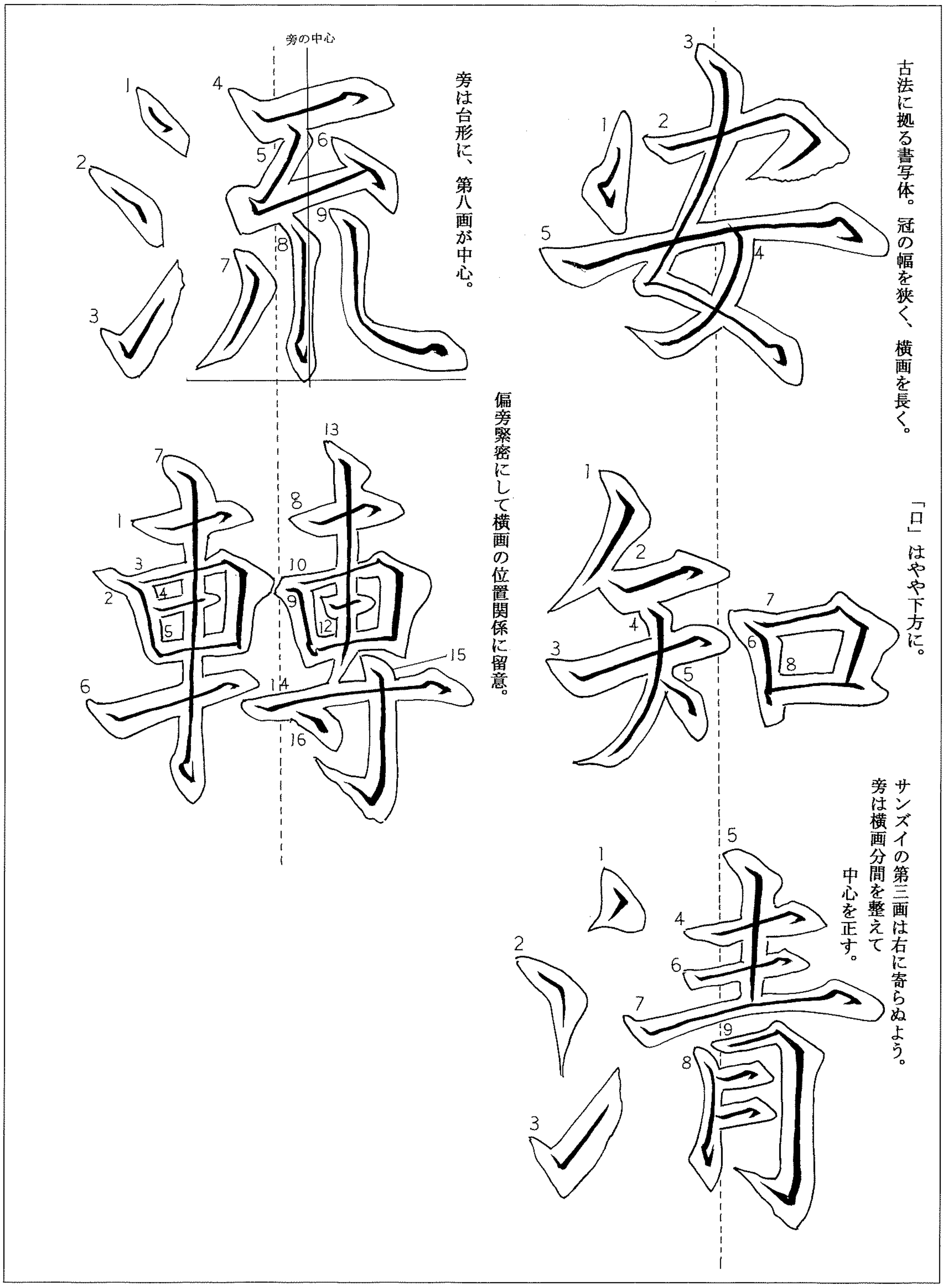
《大意》幽境にある竹は人のように物静かで、閑地に咲く花は我が為に香りを放つようだ。（黎简）

安知清
流轉

読み　安（いず）くんぞ知らん 清流転じて（思いもかけず清流は一転して）

佐藤象雲書

一般部規定課題出品について
・規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。
・初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。
・規定課題（楷書）の出品はひとり一点に限ります。



連月課題
王維詩
「藍田山の石門精舎」（前半）

落日山水好
落日　山水好し
漾舟信歸風
舟を漾わせて　歸風に信す
玩奇不覺遠
奇を玩んで遠きを覺えず
因以縁源窮
因りて以て源を縁ねて窮む
遙愛雲木秀
遙かに雲木の秀でたるを愛し
初疑路不同
初めは路の同じからざるかと疑う
安知清流轉
安んぞ知らん　清流轉じて
偶與前山通
偶々前山と通ずるを
捨舟理輕策
舟を捨てて輕策を理む
果然愜所適
果然として適する所に愜う
老僧四五人
老僧　四五人
逍遙蔭松柏
逍遙して松柏に蔭う

（後半に続く）

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

行書

安知清
流轉

草書

あち清
流轉

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

隷書

安知清
流轉

次号課題

偶與前山
通

偶（たまたま）、前山と通ずるを

（両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと）

ペン字部課題

かげひたす水さへ色ぞ緑なる
よもの梢の同じ若葉に

藤原定家

和泉溪石先生書

支部

順位

氏名

細字部課題

佐藤象雲書

音
ゲンカシュエン
セツハイキョショウ

略解
楽器を奏でて歌をうたい酒盛りをし
杯を交えて乾杯し愉快に楽しむ

（午）散を出でて秦に入り……

象雲臨

■石門頌（後漢・西暦一四八年）の臨書 (7)

『午出散入秦』

清代において碑帖いずれの書体においても優れた書を残している何紹基は、多くの隷書作品を遺していますが、その基礎となっているのは、「張遷碑」と「禮器碑」さらに「石門頌」だと言われています。今月は何紹基の「石門頌」臨書を参考に掲げます。

「午」これも原帖は明瞭ではないが、下部横画に小さい波筆としている。

「出」何紹基の臨書は原帖より全般的に幅を抑えていて方形に近く、張遷碑や禮器碑に近い。

「散」原帖は線が動的。何紹基は静的に安定させている。

「入」原帖は「人」のように見えるが、何紹基も同様。

「秦」第一横画を原帖は左右の点にしているが、何紹基は他碑と同様に一般的な横画とする。

石門頌は摩崖碑で線が勁く、何紹基の臨書は全般的に細線で張りのある線で書かれています。

原帖の傷みを考慮しながら、何紹基を参考に臨書してください。

妙道凝玄

妙道は凝玄にして……

象雲臨

■王羲之・集字聖教序（唐・西暦六七二年）の臨書(21)

『妙道凝玄』

王羲之の筆跡を集めて碑にしたこの集字聖教序は、文字間の調和が第一の問題です。今月の四文字は最初の「妙」は草書体ですが、「凝」は楷書に近い行書です。王羲之の多くの尺牘（手紙文）で使われた草書体、蘭亭序や喪乱帖などで使われた行書体、そして「黄庭経」や「楽毅論」などの楷書体など、王羲之書は書体だけではなく、書かれた時期や字の大きさも様々です。

王羲之の個性が一同に集結しているのがこの集字聖教序で、様々な顔の王羲之が存在しているのが魅力とも言えます。言うなれば、この臨書は、私たちに文字間の気脈の保ち方は任されている訳で、これを楽しみながら臨書に挑戦してください。

今月は「妙道は凝玄にして（神妙なる道ははかり知れず）」という一節です。